

IDEOLOGY AND LIBRARIES

California, Diplomacy, and Occupied Japan, 1945-1952

イデオロギーと図書館

日本の図書館再興を期して

マイケル・K・バックランド 著

Michael K. Buckland

高山正也 監訳・著作協力

Masaya Takayama

現代図書館史研究会 訳

Study Group on Contemporary Library History

樹村房

IDEOLOGY AND LIBRARIES

by

Michael K. Buckland, with Masaya Takayama

Copyright © 2021 by The Rowman & Littlefield Publishing Group, Inc.

Japanese translation rights arranged with
Michael K. Buckland and Masaya Takayama
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

日本語版への序文

本書は *Ideology and Libraries: California, Diplomacy, and Occupied Japan, 1945-1952* の全訳である。要約は第1章に著者のバックランド博士により簡潔にまとめられているので、読者各位にはそれをお読みいただきたいが、その内容を日本の図書館関係者が読むに際してどのような事項に注目するかが問題になるかと思われる。そこで、著者のバックランド博士が筆者宛に寄せてくれた本書へのコメントが、日本語版読者への格好のガイドにもなるとと思われるため、以下にその要点を紹介する。 (監訳者：高山正也)

私（バックランド）が日本の図書館に関心をもつきっかけをつくったロバート・ギトラー（Robert Gitler）の自伝¹は本質的には彼（ギトラー）の記憶による。ギトラーの自伝の編纂に際して、編者である私は、ギトラーの記憶にあるものに何かを加えたり、変更を試みることはしなかった。しかし、私は次の二つのことの研究が必要だと思った。

(1) ギトラーの記憶に基づく自伝に書かれたことを、より完全なものにするために追究すべきものが他に何かあるのだろうか？ 私は、ドン・ブラウン（Don Brown）、清岡暎一慶應義塾大学名誉教授について、もっと知りたいと思ったし、日本の図書館員に専門職資格を要求した図書館法についても知りたかった。ギトラーの自伝に書き足すべきことは何なのかを知りたかった。

(2) 正直に言って、私はギトラーが日本に行った時点で思いを致すと、ギトラーが担った使命を実現できるよりも失敗するおそれの方が大きかったと思わざるをえない。彼は日本語もできなかったし、日本についてもほとんど知らなかったと思う。日本の大学は非常に保守的であったし、図書館学などは学術分野として、ほとんど認めていなかった。ギトラーは時間も資金も十分にはもっていなかった。彼の日本での成功はまったく想像もできないような成功であった。明らかに彼の人格、献身、および熱意が成功の可能性を押し上げるのに役立ち、たいへん重要な働きをし、さらに、ドン・ブラウン、清岡暎一、そして

チャールズ・ファーズ (Charles Fahs) 等がおおいに手助けしてくれた。そうであったとしても、さらに日本図書館学校 (日本独立後、慶應義塾大学文学部図書館学科と称する) が成功して、今日にまで存続することについてはさらなる説明が必要である。

私はフィリップ・キーニーについてはまったく知らなかった。それゆえ、彼の日本での活躍、カリフォルニア州や、カリフォルニア大学バークレー校の図書館学校とのつながりを知った時には驚きであった。カリフォルニア大学バークレー校のバンクcroft 図書館 (Bancroft Library) (同大学の大学アーカイブズ) に彼 (キーニー) の個人記録が残されていたことは幸いであった。そこで、本書ではキーニーを含め、彼の提唱したキーニー・プランの着想の基になったカリフォルニア州の地域 (郡) 図書館システムも検討対象とした。

また、CIE 情報センターは短期間に発展し、大成功したが、その成功は米国が日本でそのような情報センターを開設する前に先行した戦時、外国での図書館開設・運営の経験をもっていたからこそ、成功したに違いない。そこで米国の国際交流における文化的な図書館利用の歴史を検討した。

日本でのギトラーの業績の内容や背景について調べると、カリフォルニア州の地域 (郡) の図書館や国際交流の一部としての図書館についての記述が必要となった。くわえて、日本占領軍についてはきわめて多量の占領軍による英語で書かれた文献があり、それらに触れる必要も生じた。

以上述べた文献が本書の大半を構成することになったが、私はさらにもう二つの事項について述べておくことが必要だと考えている。

第一は、日本の図書館員についての私の見方の変化である。私が資料類を読めば読むほど、調べれば調べるほど、日本の図書館サービスの不完全さ・不十分さは日本の図書館員によって引き起こされているのではなく、図書館員がやろうとすることを妨げている政治力によってであると思えるようになってきた。少なくとも日本の図書館員の中の指導者たちはよく勉強もしていれば、進歩的でもある。これは図書館を形成するための政治力についての一種のケーススタディである。同時に、英国や米国の図書館員が自由民主主義にこだわることにさらなる説明の必要性をも感じた。

第二に、日本の図書館の発展について考えれば考えるほど、図書館とは何か

について私が若い時の考えにますます戻ることにもなった。その考えとは図書館の存在はシステムとして理解すべきであるという考え方であり、この考えは私のランカスター大学図書館での経験（1965-1972）に基づくもので、私の著書 *Library services in theory and context*²（1983, 2nd ed, 1988）に、さらには、より普遍的な著述として、*Information and information systems*（1991）にまとめている。

結局、本書にはこの第一、第二に係る事項を第1～3章と最終章の第16章にまとめ、あとは日本の占領期における日本の図書館関連にあてた。図書館がどのような状況下で形成されるかについての記述が増え、特に、文化的、政治的な影響力が図書館の在り方に投影されていると考える。私は当初、書名を *Ideology and Libraries* にしようと考えたが書き進むうちに書名変更した方が良いと考えるに至った。しかし、書名を変更するには出版過程での適切な時期を失っていたので、結局、当初の書名のままにした。

私の英国での、大学学部課程修了までの専攻は歴史であり、歴史学を専門に勉強した。ただ、私は歴史家になりたいとは思わなかったので、歴史には関心をもちつつ、図書館職の途を選んだ。それはすべての事象が複雑な関係性をもつことに関心を向けさせることでもあった。そして私の後半生では歴史の研究とドキュメンテーションの理論の研究を始めた。私の図書館専門職としての職歴は二分される。前半（1963-1987）は主に図書館経営と図書館計画に関心があつた。1987年以後は（図書館の）理論と歴史に、より多くの関心を寄せることとなった。この両者は本書の執筆にたいへん有益な下地になったと私は考えている。

私は日本語文献を読む能力がないし、日本の多くの図書館については大幅に日本語文献に基づかなければならないことも十分に承知しているが、それができなかったのが残念である。そこで、私は次の二つの方法を用いた。(i)（日本事情についても）できるだけ英語文献を用いること（例えば、^{たけうちさとる}竹内 哲の学位請求論文“Education for Librarianship in Japan”は英語で書かれた日本の情報源の要約版として有用であつた）。(ii) 本書で扱う領域を慎重に限定したこと。その結果、私が日本語を読めない人間として許容される以上のことは書かないように十分留意したつもりであるし、そうなっていることを望むものでも

ある。最後に、本書が日本の図書館（史）関係者に有益であって、より完全な日本の図書館史研究の一助となることを願うものである。

マイケル・K・バックランド

注

- 1 : Robert L. Gitler; edited by Michael Buckland. Robert Gitler and the Japan Library School: An Autobiographical Narrative. Scarecrow Press, 1999, 173p.
- 2 : Michael K. Buckland. Library Services in Theory and Contexts. Pergamon Press, 1988. [参照：M.K. バックランド, 図書館・情報サービスの理論, 高山正也訳, 東京, 勁草書房, 1990, 324p.]

イデオロギーと図書館 日本の図書館再興を期して

目次

日本語版への序文 *i*

序文	——(高山正也 訳) ——	1
謝辞	——(高山正也 訳) ——	6
第1章 序論	——(高山正也 訳) ——	8
第2章 機能と構造	——(高山正也 訳) ——	10
1. 図書館サービスの類型		11
2. 組み合わせ		16
3. 図書館への、図書館内での経営資源の配分		16
4. 図書館長の役割		18
第3章 文化的背景と政治的選択	——(庭井史絵 訳) ——	22
1. 米国の公共図書館		22
2. 比較		26
3. フランスの公共図書館		27
第4章 カリフォルニア州立図書館システム	——(広瀬容子 訳) ——	33
1. ジェームズ・ギリス (James Gillis)		34
2. 図書館サービス		36
3. ハリエット・エディ (Harriet Eddy)		38
4. カリフォルニア郡図書館システム		39
5. 図書館員の養成		42
第5章 文化外交における図書館	——(池内有為 訳) ——	47
1. ジョージ・クリール (George Creel) と広報委員会		48
2. 第二次世界大戦		49
3. 戦時情報局 (OWI)		49
4. OWI 図書館・情報センター		51
第6章 日本と連合国占領下の図書館	——(佐藤聡子 訳) ——	56
1. 日本の図書館		56
2. 司書の研修		60

3. 占領に向けて	60
4. 軍事政権	62
5. 日本の図書館員	64
第7章 CIE 情報センター (金井喜一郎 訳) —	69
1. 連合国軍最高司令官総司令部 (SCAP/GHQ) の 民間情報教育局 (CIE)	70
2. ドン・ブラウン (Don Brown)	72
3. ポール・バーネット (Paul Burnette)	74
4. CIE 情報センター	75
5. 岡山	77
6. 人員配置	78
第8章 教育使節団, 1946 年 (池内有為 訳) —	81
1. 目的	81
2. レオン・カーノフスキー (Leon Carnovsky)	82
3. フィリップ・キーニー (Philip Keeney)	83
4. 図書館への勧告	84
第9章 フィリップ・キーニーとキーニー・プラン (村上篤太郎 訳) —	88
1. カリフォルニア州におけるキーニー	88
2. 統一された計画	90
3. 図書館担当官としてのキーニー	94
4. ウイロビーと「左翼」	96
第10章 国立国会図書館 (高山正也 訳) —	100
1. 帝国図書館	100
2. ファーズ (Charles Fahs) の提案	101
3. 国立国会図書館のための立法支援	102
4. クラップ (Verner Clapp) とブラウン (Charles Harvey Brown) ...	103
5. 金森徳次郎と中井正一	108
6. ロバート・ダウNZ (Robert Downs)	110
第11章 1950 年の図書館法 (村上篤太郎 訳) —	114
1. 中田邦造の草案	115
2. ジョン・ネルソン (John Nelson)	116

3. 1950年の図書館法	118
4. 図書館法の影 (A Shadow)	120
第12章 ドン・ブラウンの新たな取り組み ——(広瀬容子 訳) ——	124
1. ドナルド・ニュージェント (Donald Nugent)	124
2. アメリカ図書館協会	126
3. 陸軍の責任	129
4. ダウンズの調査	130
5. 責任者を任命する	130
第13章 ロバート・ギトラー, 清岡暎一, そして慶應義塾 ——(高山正也 訳) ——	133
1. ロバート・ギトラー (Robert Gitler)	133
2. 設置大学の選択	135
3. 清岡暎一	137
4. 杉本鉞子	138
5. 福澤諭吉と慶應義塾	139
6. 慶應義塾との摩擦	142
7. 日本人図書館員たちとの交歓・交流	145
第14章 日本図書館学校 ——(加藤好郎・高山正也 訳) ——	149
1. 開校	149
2. 教職員	152
3. カリキュラムと資源	157
4. レファレンスワークショップ	159
5. 危機とファーズ博士 (Dr. Fahs)	161
6. ロックフェラーの救援	162
第15章 後書き ——(庭井史絵 訳) ——	167
1. カリフォルニア州	167
2. 情報センター	169
3. フィリップ・キーニー (Philip Keeney)	170
4. 日本のその後	171
5. その他の米国人	173
6. 評価	174

第 16 章 要約と再考	——(高山正也 訳) ——	177
1. 歴史的事例		178
2. 日本における図書館の回顧		179
3. 米国の先導		183
4. 図書館と自由民主主義 (Liberal Democracy)		185
付録 キーニー・プラン	——(高山正也 訳) ——	190
1. 伝送スリップに記された本プランの意図		190
2. 計画本文		191
3. 組織と行政		192
4. 総合目録		193
5. 本計画の実施手順案		194
参考文献		196

インタビュー 本書を読むための予備的知見：監訳者 高山正也氏に聞く	—	207
--	---	-----

監訳者あとがき	223
年表	227
索引	234

図表目次

図

- 2.1 図書館サービスの四類型 ……12
- 4.1 ジェームズ・ギリス (James Gillis) ……35
- 4.2 ハリエット・エディ (Harriet Eddy), 1902 年 ……39
- 7.1 ドン・ブラウン (Don Brown) ……73
- 7.2 CIE 図書館, 東京 ……76
- 9.1 日本でのフィリップ・キーニー (Philip Keeney) ……95
- 9.2 帝国大学附属図書館協議会, 1946 年 ……96
- 10.1 ヴァーナー・クラップ (Verner Clapp) ……104
- 10.2 国立国会図書館での金森徳次郎, 1948 年 ……109
- 10.3 福田直美とロバート・ダウンス (Robert Downs) と一緒にの国立国会図書館指導者 ……111
- 13.1 ロバート・ギトラー (Robert Gitler) ……136
- 13.2 清岡暎一と千代野 ……139
- 14.1 日本図書館学校学科要覧, 1951 年 ……151
- 14.2 ロバート・ギトラーとフィリス・ジーン・テイラー (Phyllis Jean Taylor) (後のジーン・ブーチャー (Jean Boucher)), 日本図書館学校図書室にて ……154
- 14.3 日本図書館学校の初年次の教員と学生 ……155
- 14.4 慶應義塾大学でのファーズ博士 (Dr. Fahs), 1953 年 ……163

表

- 14.1 日本図書館学校コースリスト, 1951-1952 年 ……158

凡例

1. 本書は、Michael K. Buckland with Masaya Takayama. *Ideology and Libraries: California, Diplomacy, and Occupied Japan, 1945-1952*. Rowman & Littlefield, 2021, 170p. の全訳である。
2. 章、節、段落の分け方、および改行箇所は、すべて原著どおりとした。
3. 各章末の注、および「参考文献」における文献の記述形式は、原著を踏襲した。ただし、日本人が執筆した外国語文献の執筆者名には〔 〕の中に日本語表記を付記した。また、原著でローマ字表記されている日本語文献は、元の日本語表記とし、原著の記述形式を踏襲した。なお、翻訳書がある場合には〔参照： 〕として示し、記述形式はSIST02（参照文献の書き方）に準じた。
4. 訳者による注記を、本文中では〔 ：訳注〕、各章末の注では〔訳注： 〕として示した。
5. 外国人名は、名姓の順にカタカナで表記し、章ごとの初出時に（ ）で括った原綴を付記した。日本人名は、姓名の順に日本語で表記した。
6. 日本語訳にあたっては、次を参考にした。
 - ・日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第5版, 東京, 丸善出版, 2020, 287p.
 - ・Young, Heartsill 編. ALA 図書館情報学辞典. 丸山昭二郎, 高鷺忠美, 坂本博監訳. 東京, 丸善, 1988, 328p.
7. 巻末の索引については、次のとおりである。
 - ・原著と同様に、人名（姓名順）、組織・団体名、事項を分けることなく「百科的項目」とし、索引語の読みで五十音順に配列した。
 - ・索引語のあとに該当ページ数を示した。その際、特定の章や節すべてを指す場合や該当ページに一致する索引語が存在しない場合もある。また、各章末の注を示す場合は、ページ数のあとに「no.」と注番号を付している。
 - ・索引語には対応する原語を（ ）で括って付記した。なお、*は翻訳書独自の索引であることを示す。
 - ・参照の指示は、See（「を見よ」参照）に「→」、See also（「をも見よ」参照）に「⇒」を用いた。複数の参照がある場合は「；」で区切って示した。

以上

序文

1950年12月にロバート・ギトラー（Robert Gitler）が来日した。彼の訪日目的は大学の学部レベルでの図書館学の学校を創ることであった。それから40年経って、彼は日本での図書館サービスに関心をもっていたリンダ・アブシャー（Linda Absher）に、1951年の日本図書館学校創立の話をかいつまんで語った。彼女は私がまとめた口述の自伝書があることを知った。ギトラーの口述記録は*Robert Gitler and Japan Library School: An Autobiographical Narrative*¹として出版されていたのである。この本は全体がギトラー個人の記憶による個人的な解説そのままであり、彼の口述を執筆した私が口述内容を確認し、検証する機会も材料もほとんどなかった。

ロバート・ギトラーは彼の訪日目的を成功させはしたが、その成功は、ほとんどありえないような奇跡的な成功であったと私には思える。私は彼が直面した事態について、また影響したであろう人物や要因についてどんなものがあったのかについて知りたいと思った。私は特にドン・ブラウン（Don Brown）についてや、図書館で働く人に専門的資格要件を与える新しい法律の規定について知りたいと思った。ギトラーは、どちらもほとんど知らなかったか、ないしは、ほとんど何も言わなかったように思えた。彼の死後、2004年になって、私はもっと調べてみようと思いついた。カリフォルニアや米国の対外政策の手段として、外国での図書館の利用との思わぬ結びつきはさらなる調査を必要とした。最終的にはこのような研究は私の関心を、どうして図書館はそれぞれに異なった発展をするのかという、若い日に感じた問題意識へと私を連れ戻した。²

第一の成果は、主に英語の情報源による1945年から1952年までの占領期の日本での図書館に関わった米国人の役割に関する話である*。この期間の日本

の図書館動向に関しての十分な叙述をするのは私には荷が重すぎる。カリフォルニアと国際関係上の図書館利用についての二つの話が出てきた。くわえて、図書館サービスがそれぞれに、個別に発展する機能的、文化的理由についての検討において、この話の枠組みができてきた。本書での記述はすべてのことにに関してさらに詳細な検討が必要であるが、本書での説明が相応に役立つであろうことを私は期待している。

米国の図書館関係者として、本書に登場する人たちの多くはその名前だけでなく、個人的にも私の知っている人たちであった。彼らは私よりも前の世代の人たちであった。私とロバート・ギトラーはその晩年に交流が深まった。レイ・スワンク (Ray Swank) はパークレーでの同僚であり、友人でもあった。ジーン・ブーチャー (Jean Boucher) は私を支援し、励ましてくれた。本書に出てくるその他の人のうち、三人だけに私は会っている。ベン・ボウマン (Ben Bowman), ヴァーナー・クラップ (Verner Clapp), ロバート・ダウンズ (Robert Downs) である。ごく短い時間、そしてそれは、ほぼ50年前のこととなる。

ここに記したすべてのの人たちに感謝の意を表したい。特に友人としての高山正也教授の支援に感謝する。ギトラーの設立した図書館学科を卒業し、長くその教壇に教授職として立った後、国立公文書館長として、私に日本と日本の図書館を紹介してくれた。

注

- 1 : Robert L. Gitler [訳注 :: edited by Michael Buckland], *Robert Gitler and the Japan Library School: An Autobiographical Narrative* (Lanham, MD: Scarecrow Press, 1999).
- 2 : 例えば, Michael K. Buckland, *Library Services in Theory and Context*, 2nd ed. (New York: Pergamon, 1988); also, <http://sunsite.berkeley.edu/Literature/Library/Services/>. [参照: M.K. バックランド, 図書館・情報サービスの理論, 高山正也訳, 東京, 勁草書房, 1990.]

* [訳注] 米軍 (連合国軍) による占領政策の概要について: 占領軍図書館政策の背景の寸描

1945年9月から1952年4月までの米軍主体の連合国軍による占領政策の一環に図書館政策が組み込まれており、20世紀後半からの日本の公共図書館を中心とする図書館の在り方は大きくこの占領軍の図書館政策の影響を受けた。

占領統治は最高司令官、ダグラス・マッカーサー (Douglas McArthur) の下、連合国軍最高司令官総司令部 (SCAP/GHQ) の参謀部と特別参謀部を中心に、直接の軍政でなく、日本国の政府を通じての間接統治方式で行うというポツダム宣言の条件に則って行われた。この日本政府に指示して占領政策を行うために、SCAP/GHQの基本方針は1945年9月22日にワシントンD.C.で米国政府が発令した「日本民主化」という名目での日本弱体化計画でもある「初期の対日基本方針」にあった。この計画に基づきSCAP/GHQは日本の非軍事化、日本の民主化、財閥の解体を三つの柱とした。その中で、「日本の民主化」のプログラムに図書館が関係し、このプログラムをSCAP/GHQの特別参謀部が主に担当した。特別参謀部には約10の部局組織から構成されたが、図書館関係を含む、教育・情報文化関係については民間情報教育局 (CIE) が、憲法や国会改革関係などは民政局 (GS) が主に担当した。要するに、SCAP/GHQの占領政策は単に軍事的な、いわゆるハード・パワーによる占領政策の実行だけでなく、文化的なソフト・パワーによる占領政策も合わせて行う占領政策が採用された。

占領開始直後最優先で行われた占領政策は、旧陸海軍の解体と非軍事化とともに、憲法の改正であった。これを非軍事サイドで担当したのはGSであったが、国会改革との関連で、国会図書館の改革 (実質的に新設で、国立国会図書館法も制定) もGS主導で行われ、その他の図書館政策がCIE主導で行われたので、結果として国立国会図書館と、他の日本の図書館は分断の傾向がみられる。具体的にいうと、日本の納本規定は図書館法ではなく、国立国会図書館法にあるし、国立図書館が行政府ではなく、立法府に存在するなどである。

CIEの占領当初の大きな任務の一つは教育改革であった。SCAP/GHQは当初、占領政策実施のためのスタッフの不足に悩まされた。そこで、CIEは専門的、技術的な助言を受けるべく著名な民間人の指導者を日本に招請すべくワシントンの米国政府に要請し、1946年3月にストッダード教育使節団が来日した。使節団の報告書には、民主化における教育の果たすべき役割が論じられ、教育の機会均等や教科内容や教科書の改正、高等教育の改正、教育の地方分権など、当時の米国における最先端の教育哲学を反映した提言が行われた。

この提言も受けて、SCAP/GHQの教育改革は、いわゆる、日本の軍国主義教育、超国家主義教育の徹底的な撲滅のために旧体制の下での指導的教育関係者の追放を行い、教育委員会制度を導入し、教育行政の地方分権化を図り、教育制度の改革として、義務教育の延長 (6・3制の導入)、新制の高校・大学の創設、教育勅語を廃止して教育基本法を新たに制定するなどを行った。このような施策に加え、CIEの当初の大きな問題・

任務は日本人の超国家主義と軍国主義を思想と行動の両面から取り除くことであった。このために、日本人の洗脳を行うべく、徹底した検閲の下で、日本人の言論空間を封鎖・管理した。その対象は単に出版物のみならず、新聞・放送、映画・演劇、郵便・電信、等多方面にわたる検閲が行われ、言語の統制（言葉狩り、放送禁止用語等）が行われ、文字の使用制限（仮名遣い、当用漢字の制定）等も行われた。この「閉ざされた言語空間」への囲い込みとも言える施策の実施主体も CIE であった。

日本の占領政策は、約 7 年近い占領期間中、時期によって、その方針が変化する。占領当初の日本弱体化方針が冷戦の激化とともに見直され、特に、北京に中国共産党政府が成立した 1949 年、朝鮮戦争が勃発した 1950 年以後の占領末期には、日本を東アジアにおける共産主義膨張への防波堤にすべく、日本強化に方針変更がなされた。

CIE もそのような世界情勢、占領政策の変化の影響の下、その重点が教育における指導者の養成や文化交流へとシフトする。このように重点をシフトさせながらも、続けられた教育の民主化の中で、CIE が取り組んだ課題の一つに、「日本人司書の養成」があった。学校教育においては、従来からの日本の学校教育における教師の講義と教科書の暗記による権威主義的な学習・指導から、学校図書館を舞台に、児童・生徒による自主的な課題発見とその自主的な課題解決による学びの喜びや発見を目指す学習への移行、学校教育を終えた人々を対象に、成人・生涯学習の場における偏向したマスメディアやジャーナリズムの扇動によるポピュリズム政治への傾斜を防ぐ、健全でリベラルな民主主義社会における主権者である正しく情報を得た市民（informed citizen）の養成が不可欠となった時に、少なくとも日本の社会にはその先導役となるべき有能で成熟した司書が決定的に不足していた。

この状況下で、CIE の図書館政策が日本の図書館界では高く評価され、影響を深めることになった。占領期間中を通じて、CIE が取り組んだ主な図書館政策には次のものがある（ただし、①については GS が主、CIE は従での取り組みであった）。

- ① 国立国会図書館の創立・国立国会図書館法の公布・施行
- ② キーニー・プランの策定と図書館法制定、司書の能力向上
- ③ CIE 情報センター（図書館）の全国展開とその活動
- ④ 日本図書館学校の設立・開校

これらのそれぞれの政策についての評価は、CIE 情報センターのように、占領の終結とともに消え去った組織についての評価を除けば、政策ごとに異なるであろうし、評価者の視点ごとに異なるではあるが、「日本の図書館の 20 世紀後半から 21 世紀にかけての発展に大きく貢献した」から、その政策が当初掲げた目標から評価すると、「一定の成果があったにせよ、今一步の感がある」まで様々であろう。どうして、一様に「一定の効果が上がった」とならないのか。その理由は一つに帰せられるものではないにせよ、大きな理由となるものは、日本の図書館界の「他者依存」と、「既得権益擁護」の精神が横溢していたことに帰せられるのではないかと危惧している。すなわち、より積極的に、図書館関係者自らの当面の個人的な不利益にはこだわらず、大きな理想とし

での目標を見据え、自己犠牲も厭わずにその実現を目指していたら、少しは異なる成果も得られたかもしれない。読者各位もそれぞれのお立場、視点で評価、検討していただきたい。

最後に、読者の多くが抱くと思われる疑問の一つにお答えしておきたい。その疑問とは、占領が終結して70年もたって、なぜ、今、占領下の図書館について語るのかという疑問である。世紀が代わり、21世紀の現在、占領時代に顕著であった米ソの対立による冷戦下での国際関係の緊張は消滅したが、米国の太平洋正面の国際戦略上、大東亜戦以前には米国に対峙した日本の軍事的対抗は物の見事に占領政策によって阻止しえたものの、代わって、日本の占領政策を途中から方針変更させる一因ともなった北京の中国共産党政権が太平洋の覇権を米中で二分しようと動きだした。同政権は既存の国際法を無視し、軍事的国際膨張主義的な色彩を加え、独裁的全体主義的な体制の下に、周辺諸民族を武力で制圧し、文化を破壊し、人権を侵害し、同政権に対しては大量虐殺、民族浄化の非難も絶えない。

一方、今や日本は自由・民主主義国家群の先頭に立ち、過剰なほどの個人的自由主義と、成熟した民主主義を標榜している。日本が自由・民主主義の政治・社会体制を維持しようとするなら、連合国軍による日本占領政策の建前が、独裁的で全体主義的な国家体制から日本を自由で民主主義的（liberal democratic）な国家体制につくり変えることにあり、その占領政策の一環に図書館が組み込まれたことを今一度、想起する必要があるのではないだろうか。

くしくも2019年末から北京の中国共産党支配下の武漢に始まったウイルスが世界中に蔓延し、猛威を振るっている。感染症の常として、その勢いが一段落すると、社会の仕組みが一変するといわれる。現にこの感染症対策を巡り、日本の社会でも、積年の通弊が各方面であぶり出されてきた。折からデジタル化の只中に在り、デジタル環境下での図書館の在り方も問われている時に、日本の20世紀後半からの図書館の出発点となり、自由で民主主義社会の基盤構築を目指した占領政策の一環であった図書館政策を再考することで、示唆されることも少なくないと考える。諸賢のご一考を乞う次第である。

（文責：高山正也）

参考文献

- ・福永文夫、日本占領史 1945-1952：東京・ワシントン・沖縄、中央公論新社、2014、360p.
- ・松田武、対米依存の起源：アメリカのソフト・パワー戦略、岩波書店、2015、280p.
- ・江藤淳、閉された言語空間：占領軍の検閲と戦後日本、文芸春秋、1994、371p.

謝辞

私 [バックランド：訳注] はリンダ・アブシャー (Linda Absher) やロバート・ギトラー (Robert Gitler) をはじめとして多くの人たちに感謝したい。過去のことに熱中したギトラーの話にリンダ・アブシャーがその話を記録しようと提案したことが、ギトラーの自伝の出版につながり、それが今や本書に結実した。日本図書館学校に司書として赴任していたころは旧姓で、フィリス・ジーン・テイラー (Phyllis Jean Taylor) と名乗っていたが、今はジーン・ブーチャー (Jean Boucher) と名乗っているギトラーの教え子の一人は本書の執筆を励ましてくれ、彼女の下にあった資料を見せてくれた。

その他にも多くの人たちのご助力と励ましを戴いた。コリン・バーク (Colin B. Burke) は歴史と軍事の問題に関する手引きを継続的にしてくれた。ボイド・レイワード (W. Boyd Rayward) とメラニー・キンボール (Melanie A. Kimball) はアメリカ図書館協会のアーカイブズ利用を支援してくれた。マルラ俊江 (Toshie Marra) と齋藤泰則 (Yasunori Saito) は日本語資料を手伝ってくれた。カリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkeley) のすばらしい蔵書と司書たち、特にノースタン・リージョナル図書館施設 (Northern Regional Library Facility) とバンクcroft 図書館 (Bancroft Library) があって、はじめて本書の出版は可能となった。私はまた、イリノイ州アーバナ・シャンペーン (Urbana-Champaign) にあるイリノイ大学 (University of Illinois) 内に設けられたアメリカ図書館協会アーカイブズ、ニューヨーク州スリーピー・ホロウ (Sleepy Hollow, New York) にあるロックフェラー・アーカイブ・センター (Rockefeller Archive Center)、およびカリフォルニア州立図書館 (California State Library) のハリエット・エディ (Harriet Eddy) 文書のおかげを被っている。イネッサ・ゲルフェンボイム・

リー (Inessa Gelfenboym Lee) とアンナ・ザイツェフ (Anna Zaitsev) にはロシア語文書の世話になった。ヴィヴィアン・ペトラス (Vivien Petras) とウェイン・デ・フレメリー (Wayne de Fremery) は励ましと有益な助言をしてくれた。深く感謝したい。

写真の出典

- ・ Bancroft Library, University of California, Berkeley, Keeney Papers, BANC MSS 71/157, box 2 : 1: 図 9.1 および 9.2
- ・ California State Library, Sacramento: 図 4.1 および 4.2
- ・ Library of Congress: 図 10.1
- ・ Rockefeller Archive Center, Sleepy Hollow, NY. Series 609 (Japan), box145: 2737: 図 14.4
- ・ 高山正也: 図 13.2, 14.2, および 14.3
- ・ University of Illinois, Urbana-Champaign, RS 35/1/22, Box 33, Folder "Japan, National Diet Library Staff, 1948": 図 10.2 [10.2 は正しくは 10.3 : 訳注]
- ・ 横浜開港資料館: 図 7.1, 7.2, および 10.3 [10.3 は正しくは 10.2 : 訳注]

第1章

序論

1950年12月にロバート・ギトラー（Robert Gitler）が日本にやって来た時、彼の任務は日本での評価の高い大学に大学学部レベルの図書館学の教育・研究拠点を設置することであった。日本の大学は保守的であり、保守的であることは大学の本質の最たるものであった。ギトラーは日本語も知らなかったし、日本について何も知らないで日本に着いた。ギトラーは短期の滞在しか想定していなかったし、時間の余裕もほとんどなかった。それにもかかわらず、彼の任務は成功裡に達成された。彼は日本図書館学校（The Japan Library School）の設立者であり、初代の主任（director）となり、ギトラーの創ったその学校は70年経った現在、東京にある名門慶應義塾大学の評価の高い文学部図書館・情報学系図書館・情報学専攻となっている。

ギトラーの成し遂げた仕事を調査するには、日本における図書館の検討のみならず日本以外の国での図書館の発展事例の検討、主にカリフォルニア州の事例に加え、外交手段として外国での図書館の在り方についての検討も必要となった。そうすると必然的に関心はより難しく、軽視されがちなテーマ、どうして図書館は国や地域によって異なるのかという問題に向けられる。結局、英語を母語とする国を主にした検討になるが、このテーマは検討するに足るだけの話であるように感じた。

本書では第2章での、図書館サービスにみられる機能的な差異についての検討から始めることとする。異なる利用者群にサービスを提供する図書館は、その利用者群の求めるサービスを重視した結果、図書館ごとに提供するサービスが異なる。月並みに図書館を四館種に分けてみる。すぐにわかるように、典型的な公共図書館は典型的な大学図書館とは異なるし、大学図書館は専門化された企業図書館や小学校図書館とも異なる。それぞれの図書館はその蔵書、空間

の利用，提供されるサービスの方法，社会におけるその図書館の役割等において大きな違いがある。

また，一つの社会の中で生活することで，そこに暮らす人々が文化的な同一性をもつと同様に，ある文化圏に存在する図書館も所属する文化圏と同一の文化的な特性・文脈をもつ傾向にある。図書館がある文化的な文脈に属していると，その図書館はもっている文化的文脈の特徴を反映する傾向にある（第3章参照）。

第4章から第14章までは三つの歴史的な物語である。すなわち，最初が単独の州内，具体的にはカリフォルニア州の図書館サービスの進展についての事例であり（第4章），次いで文化的な影響を行使するために他国における，ある国のサービスの提供についてである（第5章）。そして，その後は，第二次世界大戦後の連合国の日本占領期間中，1945年から1952年までの日本における異なる文化をもった二つの異なる政府ともいえる政策実行主体が，共働して図書館を再興・発展させる努力についてのより詳細な記述となる（第6-14章）。さらに，これらの物語に登場した個人や組織が1952年以降〔日本独立以降：訳注〕に直面した事柄についての記述がある（第15章）。最後の第16章は若干の結論的な内容を述べている。

長い時間を経て，図書館サービスの実務は徐々にではあるが国内的にも国際的にも，標準化されてきているように感じられる。1950年当時と比べれば，図書館の変容は〔国や文化環境が変わっても：訳注〕今や小さく，1900年以前よりも目立たなくなった。また，本書が扱った時代は，ほぼ20世紀の前半であり，図書館蔵書は紙媒体か，マイクロフィルムや手書き画像などの特定なメディアによるものであり，読者と，蔵書としての記録物は，利用に際しては同じ場所になければならなかった。それゆえ，地域ごとに形成される蔵書群〔地域分館等の図書館のこと：訳注〕はデジタル文献化されて，記録が1カ所に統合・蓄積され，他の場所においても利用時に画面展示により利用可能というような現在と比較すれば，その存在は，はるかに社会的な重要性を有していた。

次章（第2章）は，図書館サービスの様々な形とそれを創った様々な目的との関係について検討したい。

第2章 機能と構造

図書館は人がそれぞれに皆異なっているようにそれぞれ異なる。人は肉体的にも文化的にもそれぞれ異なる特徴をもちながらも、共同体の中で類似性をもつ傾向にある。人間はたいへんに複雑であり、人間同士の差は非常に小さいことが多いため、異なる集団について意味のある比較をすることは難しい。社会諸科学における論考はいくつかの取り上げる値打ちのあると思われる現実の、もしくはわずかな理論上の事例を取り上げ、単純化し、理解しやすくしている。例えば、「典型的なフランス人」という類である。こういうことが行われる時にその事例は典型とされる。そのような典型は通常、代表として選ばれた特定の個人ではなく、指標的な、また統計的なデータに基づく観念上の対比である。例えば、0.5 人の子どもなどありえないが、ある地方の家族には子どもが平均で 1.5 人いるということは意味がある。

典型的な利用はまた、なぜ、どのように図書館は異なるかを検討するにあたって、便利である。伝統的に図書館は4つの館種に分けられている。すなわち、大学図書館としての学術研究図書館、娯楽や教養のための読書に資する公共図書館、小学校や中学校の学校図書館、そして「専門」図書館とは、企業、特に交易に関わる会社、製造業、研究開発に携わる企業のみならず、政府機関やその他の組織等にある専門特化した図書館である。専門図書館はまた、ドキュメンテーションセンターとか情報センターと呼ばれていることでも知られている。これらの四館種はすぐにわかるほどに相互に異なっている。ある館種を他の館種と取り違えることはありえないが、司書はその生涯の職歴を通じてこれら館種のどれか一つに専門特化する傾向がある。

1. 図書館サービスの類型

おおむね、図書館の伝統的な四館種は同じ類型のサービスを提供する。違いは、どのサービスに重点を置くかである。それゆえ、本書での検討を、図書館の類型から図書館サービスの類型に移し、読者〔図書館利用者：訳注〕の様々な情報要求を用いて、関心のあるトピックと関心のある情報源とに区分して、図書館サービスの4つの典型的な類型を提示する。¹

トピック (topic) とは、図書館利用者が読みたいと思っていること全般を指す。読者 (利用者) は、事実の記述、解説、議論、もしくはその他の物語を求めているかもしれない。情報源 (source) には、あらゆる種類の記録文書、刊行物、データセット、もしくは他の記録媒体〔紙媒体以外の記録媒体等：訳注〕を含んでいる。

トピックも情報源も共にかなり固有のものであって、かなり正確に示される。特にトピックは厳密に定義される場合もある。例えば、鉛の融点は何度であるのか、1900年のクラゲンフルト (Klagenfurt) [オーストリア、ケルンテン州の州都：訳注] の人口は何人であったか、などである。しかし、印象派画家の絵画への案内書とか、定年退職後の人生設計へのガイドブックといったようなより一般的なトピックもある。そして、この反対の極には推理小説、恋愛小説、旅行記のように単純な文芸ジャンルに対する要求もある。極端な事例をあげれば、テキストが楽しませたり、人を鼓舞したり、その他関心を寄せるに値するものであるならばトピックはまったく取るに足らぬものであるかもしれない。

これに加えて、利用者の関心がどれだけ特定の情報源から離れているかについてもばらつきがある。仮に利用者が求めている情報を提供できるのであれば、どのような情報源でもよいとされるかもしれない。時には特定の著者や文章が求められる。極端な場合には、原稿の特定箇所の写しだけが、あるいは刊行された作品の特定の版次のみが求められ、ほかの情報源では代用できない要求もある。原文が書き換えられ、異なるいくつかの稿本が存在する時には、誤り、書き足し、訂正などが生じるため、原稿の個別の写し (「証拠物件」) は重

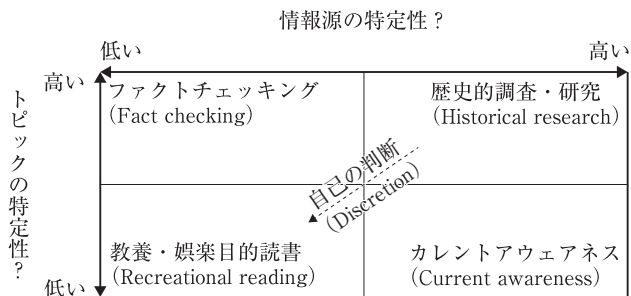


図 2.1 図書館サービスの四類型

要な手掛かりになる。例えば、伝記作家は伝記の対象者が所有していた個別の図書の余白に書き込まれた文言をたいへん読みたがるであろう。

トピックが特定化されている程度と、情報源が特定化されている程度を組み合わせると、図 2.1 に示すような 2 行 2 列のマトリックス [行列：訳注] となり、ここに図書館サービスは、ファクトチェック (fact-checking)、歴史的調査・研究 (historical research)、教養・娯楽目的読書 (recreational reading)、カレントアウェアネス (current awareness) の 4 区分に識別できる。

ファクトチェック (Fact-checking) 上段左側の欄はあらゆる回答が役立つ場合である。近刊の信頼するに足る著作の小さな集合がそのトピックに対応するとして用いられる。これらの著作はより信頼度の高い、より新しい著作が入手されると廃棄される。例外的な問い合わせには限られた蔵書では対応できないので、他館に回される。このような図書館サービスの仕方は比較的に信頼できる文献で構成された、そこそこの蔵書に依存する図書館でのかなり特殊な要求への対応である。このサービスのやり方は多くの図書館での参考部門で見ることができる。

カレントアウェアネス (Current awareness) 反対に、図 2.1 の下段右側の欄は、未知の進歩に関するあらゆるトピックについてのニュースのような特定の注意喚起サービス等に割り当てられる場所である。一般には、情報源は技術雑誌、新刊書の文献目録、あるいは特許の公開公報、議会の新規立法・条例等に関する官報・公告類等のような逐次刊行物である。未知の進展がないということは、それはそれで競争の世界にあっては重要な情報となる。

これら2種類のサービスの仕方は長きにわたって、別の名前で呼ばれてきた。情報検索文献では、それらはそれぞれ、アドホックサーチ (ad hoc search) とフィルタリング (filtering) と呼ばれている。ここでは次の二つの理由からさらにその特徴について述べる。第一に、ファクトチェックング (特定のトピックとそれに対応する情報源) とカレントアウェアネス (特定の情報源とそれに適合する情報) の特徴は対称的であるといえる。第二に、これら二つのサービスの組み合わせは専門図書館の特徴になる。専門図書館は図書館の類型と図書館サービスの類型に区分することでよく示すことができる。

しかしながら、トピックと文献の他の二つの組み合わせは、我々の検討のためにはより重要である。

歴史的調査・研究 (Historical research) もしくは、先行研究文献の徹底的な探索を求めるその他の厳格な研究分野では図書館に対して厳しい要求がなされる。図書館の利用者たちは特殊なニーズをもつ傾向があり、厳密に特定化された文献がきわめて重要である。研究者たちは、文献の著者が執筆の時点で言おうとしたことを理解するために、著者がどのように書いたかを知るための特定の文献、しかも、その正確な原文表現を見ることが必要である。また、特定のトピックに関しては、原文の評価・検討、それもできるだけ多くの評価・検討がそのトピックの研究史を形成するためには必要となるかもしれない。このような包括的な〔情報要求に対応する：訳注〕図書館の類型が、特定文献群の範囲を際限なく広げることになる。〔広げるとはいえ、：訳者〕代用の文献では受け入れられないし、少なくとも、疑念をもたれる。優れた書誌的な手段が、可能な限り文献や課題を明らかにするべく、用意されている必要がある。

これは大規模な図書館にとっては、その図書館で用いられている分類表や議会図書館の件名標目表に見られるようにたいへん厄介なものである。図書館にとって大きすぎる、多すぎるということはない〔図書館やその蔵書にとって、大きければ大きいほど、多ければ多いほど良い：訳注〕。ただ、余分になった複本が廃棄されるだけである。正確な目録作成や書誌記述は、本来、必要不可欠であるが、緊急性がそれほど高くないことが多いため、たいして費用もかけず、閉架書庫内での利用でだいたい我慢できる。実際、徹底的な完全性はありませんし、実現不可能でもある。そこで、図書館間相互貸借、蔵書構築における分担

注

- 1 : 本章は、次を典拠としている。Michael K. Buckland, "On Types of Search and the Allocation of Library Resources," *Journal of the American Society for Information Science* 30, no. 3 (May 1979): 143-47.
- 2 : より詳細な議論については、次を見よ。Michael K. Buckland, *Library Services in Theory and Context*, 2nd ed. (Oxford: Pergamon, 1988), chaps. 11 and 12; also, <http://sunsite.berkeley.edu/Literature/Library/Services/>. 政治的および経済的プロセスがどのように関連しているかについては、次を見よ。Albert O. Hirschman, *Exit, Voice, and Loyalty; Responses to Decline in Firms, Organizations, and States* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1970).
- 3 : Yeheskel Hasenfeld, *Human Service Organizations* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-

監訳者あとがき

本書は、米国カリフォルニア大学バークレー校の情報学校（School of Information）の名誉教授であるマイケル・K・バックランド博士（Dr. Michael K. Buckland）の近著 *Ideology and Libraries: California, Diplomacy, and Occupied Japan, 1945-1952* の全訳である。この「情報学校」（School of Information）とは大学院課程に属するプロフェッショナルスクール、図書館学校（School of Librarianship）に起源をもつ、大学院の研究科専攻が図書館情報学の発展とともに、その名称も幾度か変わり、現在に至るが、広義の情報管理の理論および技術の研究と教育に関する世界の指導的立場を維持している高等研究・教育機関である。

2019年の秋に、ここの旧知のバックランド博士から連絡があり、「今度、占領下の日本の図書館についての書物をまとめたいと思うので、協力を頼みたい。ついては共著で書かないか」とのお誘いを受けた。折から、偶然かもしれないが自らの研究活動の総まとめとして、日本の図書館についての執筆活動を模索していた時期とも重なり、たいへんに魅力あるお誘いであると感じた。しかし、熟慮した結果、「協力は喜んで行うが、共著はご遠慮させていただく。理由はもはや、私には加齢により、新たな史実を掘り起こし、そして新たな学術成果を得るために図書館やアーカイブズ、その他コレクションを発掘・調査するだけの「フットワーク」の能力が失われているからだ」と返事をした。この返事をするための基礎には、もう一つの思いもあった。

それはバックランド博士が、現代の高度な知識人として、英米国人の一般人や、さらには多くの国際的に主流を構成する歴史観をもって、第二次大戦後の連合国軍の日本占領とそこでの図書館政策を論じることとなるはずである。一方の監訳者である本稿の筆者は、特定の政治思想を支持するものではないものの、いわば一介の、老日本国民として、連合国軍の占領についての実体験記憶が、幼かったとはいえ、一敗戦国民の意識として今も鮮明である。また、今や国際的な常識となっているともいわれる1945年の日本の敗戦や、その後の占領から現在に至る東京裁判史観に依拠する歴史観に、健全な日本人なら誰もが

抱く複雑な思いや違和感を覚えている。日本の国内的には最近急速に高まってきた自虐史観の見直しの風潮、そのような歴史観を煽ってきたオピニオンリーダーたちの権威失墜、歴史学的にはマルクス主義唯物史観の崩壊、若い世代を中心とする近現代日本の歴史観や、日本とアジア諸国との関わりの見直しにも相応に理解を感じていたからでもあった。このような思いが、はたしてバックランド博士の歴史観と整合性のとれた形で調和しうるか、共著者となれば、著作物をまとめる妨げになるのではないかと恐れたからでもあった。

バックランド博士の経歴は1941年に英国に生まれ、オックスフォード大学で歴史学を学び、シェフィールド大学で図書館専門職資格と博士学位を取得し、母校オックスフォード大学のボードリアン図書館やランカスター大学図書館での実務経験を積んで、1972年に米国に移り、パーデュー大学図書館での副館長経験の後に、カリフォルニア大学バークレー校の図書館情報学科(School of Library and Information Studies)教授に招かれ、1970年代後半から1980年代前半にかけて同学科のディーン(dean)を務めたほか、ディーン在職中の1983年から4年間にわたり、同大学、バークレー校やロスアンジェルス校等の合計9校から成るカリフォルニア大学を統括する副総長補佐を兼務している。20世紀後期から21世紀にかけて米国を中心に活躍した図書館情報サービスにおける世界の理論的なリーダーの一人であり、現在はカリフォルニア大学バークレー校の名誉教授である。

日本との関わりの一端は、同博士がバークレー図書館学校のディーン在職経験から、バークレー図書館学校の卒業・修了者に、占領期日本の図書館政策にかかわった人物が複数いることに気づいたことにあるという。その人物たちとは、フィリップ・キーニー(Philip Keeney)、ポール・バーネット(Paul Burnette)、およびロバート・ギトラー(Robert Gitler)等である。ここに名前を出した三人は単にバークレー図書館学校の同窓生というだけではなく、といって三人が一緒になって、日本での占領軍の図書館政策に関わったわけではない。キーニーは占領の初期に日本の図書館の全国計画を提唱し、バーネットは占領中期以降に、CIE情報センターの全国展開に関わり、ギトラーは占領末期に、日本図書館学校の開設とその実行・運営に関わった。働いた時期も、その仕事の内容も異なるが、三人ともに、バークレー図書館学校の実質的な創設

者ともいうべき、シドニー・ミッチェル (Sydney Mitchell) の図書館理念に強い影響を受けていたのである。このことは今日まで、あまり論じられることはなかったが、バックランド博士の指摘を受けて、なるほどと感じたものである。ミッチェルへの言及は、バックランド博士がパークレー図書館学校のディーン職に長期にわたって貢献されたこととも無関係ではないと思われる。また、同じパークレーのディーン職の先輩にあたるスワンク博士 (Dr. Raynard Coe Swank, 1913-1995) の影響もあったかもしれない。スワンク博士は国際的な図書館問題に関心が深く、訪日経験もあり、1950-70年代の日本の図書館学界の指導者たちとの交流ももっていた。

三人の中でも、特に、ギトラーについては、1999年に *Robert Gitler and the Japan Library School* を最晩年のギトラーの口述記録¹をもとに出版したことが、日本の、特に占領期の図書館の在り方に関心を寄せる大きな動機につながったことは本書のバックランド博士の「序文」でも明らかにされている。また、ギトラー、その人の事績については第13・14章に詳しい。

バックランド博士は日本語を解さない。筆者に共同研究をもちかけた一因もそこにあったと思われる。しかし、できあがった本書には若干の日本語文献の適切な利用も示されている。博士の本書にみる研究の方法は、歴史学研究の王道かもしれないが、もっぱら、歴史記録としてアーカイブズに保存されている日本占領に関する記録と、日本占領政策の一環である図書館政策に関する先行研究文献に依拠している。こうして米国内にある史資料をベースにして研究し、その成果をまとめた結果、ある面で戦後日本の図書館史の空白部分を埋めるに足るおおいなる研究成果とすることができたことは、博士のもつ深い学識が基礎となっていることは言うまでもないが、それを助けて、可能にした米国の図書館やアーカイブズ（文書館）のコレクションと、そこに働くスタッフの優秀さに負うところも大きいと思われる。そのような米国の図書館サービスを目指して出発したはずの日本の図書館界が、現在ではなぜこのように日米で差がついているのかを本書を読むことで、読者各位には考えていただきたく、そのためにはぜひ本書を翻訳し、一人でも多くの図書館に関心をもつ人に読んでほしいと考えたのが本書翻訳の発端である。本書が現代日本の衰微したかに見える図書館の再興の一助になればと願っている。

しかし、もはや翻訳のような細かな作業を行うにはいささか高齢になりすぎている監訳者の危惧の念を身近な友人に漏らしたところ、自発的に翻訳作業を買って出てくれたり、知り合いの若手の有能な研究者を紹介していただいたりした。そこで翻訳グループとしての「現代図書館史研究会」が組織され、本書の翻訳が順調に進められた。研究会に参加していただいた各位のご努力と翻訳作業とに、深く敬意と謝意を表したい。その研究会を取りまとめ、年表や索引作成などの基礎的で、図書館情報学の素養を必要とする地味な部分をご担当いただいた東京農業大学の村上篤太郎教授には特にその名をあげて謝意を表したい。また筑波大学の逸村裕教授、慶應義塾大学の岸田和明教授からは有益な助言や研究会メンバーのご推挙をいただいた。そして（株）樹村房の各位にはお世話になり、COVID-19による感染症下で本書の出版が可能になったが、特に一年余にわたる期間、細やかなご配慮と作業とに献身していただいた安田愛氏のご努力には研究会一同に成り代わり、厚くお礼申し上げたい。

本書はこのような多くの方々のお力を結集しての翻訳書である。それぞれの方が担当業務に真剣に、熱心に取り組んでくださったことに重ねてお礼を申し上げ、監訳者として敬意と謝意を表したい。しかし、出版物の常ともいうべく、細部には思わぬ瑕疵や能力不足からくる誤りが残っているかもしれない。これらの責任はすべて監訳者にあるので、もし気づかれたら、どうか率直で建設的なご指摘を賜りたい。本書が読者各位にとり、また日本の図書館再興に向けて何らかのお役に立ち、参考となることを願っている。

令和3(2021)年5月

監訳者 高山 正也

注

- 1 : Robert L. Gitler [訳注 : ; edited by Michael Buckland]. Robert Gitler and the Japan Library School. Scarecrow Press, 1999, 173p.

著者紹介

Michael K. Buckland (マイケル・K・バックランド)

カリフォルニア大学バークレー校名誉教授 (School of Information), Electronic Cultural Atlas Initiative 共同ディレクター。

1941 年英国に生まれ。オックスフォード大学で歴史学を学び、シェフィールド大学で図書館専門職資格と博士学位を取得。母校オックスフォード大学のボードリアン図書館やランカスター大学図書館で実務経験を積み、1972 年に米国に移る。パーデュー大学図書館での副館長経験の後に、カリフォルニア大学バークレー校の図書館情報学科 (School of Library and Information Studies) 教授に招かれ、1970 年代後半から、1980 年代前半にかけて同学科の学科長 (dean) を務めたほか、dean 在職中の 1983 年から 4 年間にわたり、同大学、バークレー校やロスアンジェルス校等の合計 9 校から成るカリフォルニア大学を統括する副館長補佐を兼務した。

主著: *Library Services in Theory and Context* (Pergamon, 1983; 2nd ed. 1988), *Information and Information Systems* (Praeger, 1991), *Redesigning Library Services* (American Library Association, 1992), *Emanuel Goldberg and his Knowledge machine* (Libraries Unlimited, 2006), *Information and Society* (MIT Press, 2017), and *Ideology and Libraries California, Diplomacy, and Occupied Japan, 1945–1952* (Rowman & Littlefield, 2021), 2018 年に ASIS&T Best Information Science Book of the Year Award を受賞。これらに加え、*Robert Gitler and the Japan Library School :An Autobiographical Narrative*, (The Scarecrow Press, 1999) の編集もある。

監訳・著作協力者紹介

高山 正也 (たかやま・まさや)

慶應義塾大学名誉教授, (株) ライブラリー・アカデミー塾長。

1966 年慶應義塾大学商学部卒業。1970 年慶應義塾大学大学院文学研究科図書館情報学専攻修士課程修了 (文学修士)。1980 年慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士課程単位取得退学。1982-83 年フルブライト奨学生としてカリフォルニア大学バークレー校留学。1970 年東京芝浦電気 (株) 入社, 技術情報センター勤務。1976 年慶應義塾大学文学部図書館情報学科助手就任, 専任講師, 助教授, 教授を経て, 1987 年大学院文学研究科委員 (大学院教授)。2006 年慶應義塾大学退職, 慶應義塾大学名誉教授就任, (独) 国立公文書館理事就任, 2009 年 (独) 国立公文書館館長, 2013 年 (独) 国立公文書館退職。2017 年 (株) ライブラリー・アカデミー塾長。

主著: 『図書館概論』(雄山閣出版, 1977), 『図書館・情報サービスの理論』(翻

訳, 勁草書房, 1990), 『図書館サービスの再構築: 電子メディア時代へ向けての提言』(共訳, 勁草書房, 1994), 『公文書ルネッサンス: 新たな公文書館像を求めて』(編, 内閣府大臣官房企画調整課, 2005), 『現代日本の図書館構想: 戦後改革とその展開』(共同編・著, 勉誠出版, 2013), 『歴史に見る日本の図書館: 知的精華の受容と伝承』(勁草書房, 2016), 『文書と記録: 日本のレコード・マネジメントとアーカイブズへの道』(監修, 樹村房, 2018), その他略。

訳者紹介

現代図書館史研究会 [執筆順]

庭井 史絵 (にわい・ふみえ)

青山学院大学教育人間科学部准教授。

青山学院大学大学院教育人間科学研究科教育学専攻博士後期課程修了, 博士(教育学)。慶應義塾普通部司書教諭(2001~2018年度)を経て, 2019年度より現職。専門は図書館情報学(学校図書館)。

主著: 『学校図書館への研究アプローチ』(共著, 勉誠出版, 2017), 『学校図書館メディアの構成』(共著, 樹村房, 2016)

担当章: 3・15章

広瀬 容子 (ひろせ・ようこ)

株式会社ラピッツワイド代表取締役。

ピッツバーグ大学大学院情報科学科修了, 修士(図書館・情報学)。学校司書を経て1989~2002年日外アソシエーツ, 2003~2005年ピッツバーグ大学東アジア図書館日本情報センター, 2005~2015年トムソン・ロイター(現クラリベイト), 2015年より現職。サイバートラスト株式会社社外取締役, 東京農業大学大学院非常勤講師(情報検索), 昭和音楽大学非常勤講師(資格課程)を兼務。専門は図書館員の外見が及ぼす図書館の社会的認知度。

主著: 『ライブラリアンのためのスタイリング超入門: キャリアアップのための自己変革術』(樹村房, 2018), "Use of Private Sector Dynamism in Japanese Public Library: Ebina City Central Library," *BIBLIOTHEK Forschung und Praxis* (2017) DOI: <https://doi.org/10.1515/bfp-2017-0032>

担当章: 4・12章

池内 有為 (いけうち・うい)

文教大学文学部専任講師。

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程単位取得退学，博士（図書館情報学）。フェリス女学院大学附属図書館（1997～2005年）を経て，2019年度より現職。専門は学術情報流通，オープンサイエンス。

主著：「日本の研究者によるデータ公開の実践状況と認識」（博士論文，2019），「プレプリントの利活用と認識に関する調査」（文部科学省科学技術・学術政策研究所，2021），『環境問題を解く：ひらかれた協働研究のすすめ』（分担執筆，かがわ出版，2021）

担当章：5・8章

佐藤 聡子 (さとう・さとこ)

同志社大学免許資格課程センター嘱託講師，筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群（博士後期課程）情報学学位プログラム在籍。

同志社大学大学院総合政策科学研究科総合政策科学専攻博士前期課程修了，修士（政策科学）。専門は公共図書館経営。

主著：「公立図書館への指定管理者制度導入時・導入後の運営に地方公共団体関係者の認識が与える影響」（共著）『同志社図書館情報学』No. 29（2019），「公立図書館の指定管理者制度に関する国の認識：検討過程・通知等の分析から」『同志社図書館情報学』No. 30（2020）

担当章：6章

金井 喜一郎 (かない・きいちろう)

相模女子大学学芸学部日本語日文学科准教授。

慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士後期課程単位取得後退学，修士（文化情報学）。昭和音楽大学附属図書館司書，昭和音楽大学短期大学部准教授を経て，2019年度より現職。専門は図書館情報学，音楽図書館学。

主著：「利用者の音楽情報要求に基づくメタデータ要素の差別化：FRBR, FRAD, Variationsを対象に」『Library and information science』no. 70（2013），“Manually identifying the entities of work and expression based on music MARC data: towards automatic identification for FRBRizing OPAC,” *Fontes Artis Musicae*, vol. 62, no. 2（2015）

担当章：7章

加藤 好郎（かとう・よしろう）

鶴見大学講師，昭和音楽大学講師。

慶應義塾大学文学研究科図書館・情報学専攻修士課程修了，修士（図書館・情報学）。慶應義塾大学三田メディアセンター事務長，慶應義塾大学 SFC キャンパス事務長，愛知大学文学部教授を経て，2021 年度より現職。専門は図書館・情報学，現代マーケティング論。

主著：『大学図書館経営論』（勁草書房，2011），『書物の文化史』（共著，丸善出版，2018），『図書館文化論』（丸善出版，2021 年 7 月刊行予定）

担当章：14 章

高山 正也〔座長〕

担当章：日本語版への序文，序文，謝辞，1・2・10・13・14・16 章，付録

村上 篤太郎（むらかみ・とくたろう）〔事務局〕

東京農業大学学術情報課程教授。

南山大学文学部教育学科卒業。南山大学図書館，慶應義塾大学医学情報センター係主任，湘南藤沢メディアセンター係主任時に慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻修士課程委託研究生修了。三田メディアセンター課長，湘南藤沢メディアセンター事務長，メディアセンター本部課長，湘南藤沢事務室看護医療学部担当課長，デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター事務長を経て，2019 年度より現職。専門は図書館学，地方議会図書室。

主著：『改訂 図書館サービス概論』（共編著，樹村房，2019），『改訂 図書館情報資源概論』（共著，樹村房，2020），『現代日本の図書館構想：戦後改革とその展開』（共著，勉誠出版，2013）

担当章：9・11 章

助言・協力者紹介

逸村 裕（いつむら・ひろし）

筑波大学図書館情報メディア系教授

岸田 和明（きしだ・かずあき）

慶應義塾大学文学部教授

イデオロギーと図書館

日本の図書館再興を期して

2021年7月7日 初版第1刷発行

検印廃止

著者 マイケル・K・バックランド
監訳・著作協力者 高山正也
訳者 現代図書館史研究会
発行者 大塚栄一

発行所 株式会社 **樹村房**

〒112-0002

東京都文京区小石川5丁目11-7

電話 03-3868-7321

FAX 03-6801-5202

振替 00190-3-93169

<http://www.jusonbo.co.jp/>

組版・印刷／亜細亜印刷株式会社

製本／株式会社渋谷文泉閣

©現代図書館史研究会 2021 Printed in Japan

ISBN978-4-88367-354-4 乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。